

2024 JFFID 日本代表候補合宿トレーニングマッチ VS 矢板中央高校



日時	2024年12月1日 9:00				試合形式	45分×2set 35分×1set				
会場	さくらスタジアム				ピッチ状態	天然芝				
日本代表			2	0 1set 1 2 2set 2 0 3set 2	5	矢板中央高校				
警告・退場	3set	2set	1set	チーム合計			1set	2set	3set	警告・退場
	1	6	3	10	シュート	31	8	12	11	
	6	5	12	23	GK	3	0	3	0	
	0	3	0	3	CK	13	5	3	5	
	1	7	4	12	直接FK	13	5	5	3	
	1	0	0	1	間接FK	1	0	0	1	
	1	0	0	1	(オフサイド)	1	0	0	1	
	0	0	0	0	PK	0	0	0	0	

【日本】

1 set



2 set



3 set



【矢板中央高校】

1 set



2 set



3 set



【得点経過】

1 s e t

27分[矢板中央高校]NO.14にゴール前で左サイドから中央にドリブルで運ばれる。逆サイドフリーのNO.42にパス。ペナルティエリア外からダイレクトシュート決まる。

2 s e t

18分[日本]右サイド大野がニアゾーンに侵入し、マイナス方向にパス。下鶴のシュートが一度はDFに阻まれるも、自ら押し込みゴール。

20分[矢板中央高校]左サイドからクロスボールをNO.79がヘディングシュート。

27分[矢板中央高校]スローインのリスタートからDFラインを抜け出したNO.46がシュート。

29分[日本]右サイド大野が犬塚とのワンツーでニアゾーン深くまで侵入。ゴールエリア中央付近で待ち構えていた武田がシュート。

3 s e t

4分[矢板中央高校]右サイドのクロスボールをペナルティエリア内でNO.46が1タッチシュート。

28分[矢板中央高校]右サイドクロスボールをファーサイドでNO.8がヘディングシュート。

【交代】

2 s e t

7分[日本]	IN	大久保	⇔	OUT	松野
18分[矢板中央高校]	IN	NO.27	⇔	OUT	NO.33
	IN	NO.46	⇔	OUT	NO.38
	IN	NO.8	⇔	OUT	NO.42
	IN	NO.19	⇔	OUT	NO.14
	IN	NO.18	⇔	OUT	NO.41
	IN	NO.38	⇔	OUT	NO.79
	IN	NO.24	⇔	OUT	NO.22
	IN	NO.68	⇔	OUT	NO.13
	IN	NO.79	⇔	OUT	NO.6
	IN	NO.69	⇔	OUT	NO.28
27分[日本]	IN	原	⇔	OUT	佐藤
	IN	犬塚	⇔	OUT	奥田
39分[日本]	IN	梅村	⇔	OUT	下鶴

3 s e t

17分[日本]	IN	佐藤	⇔	OUT	大野
	IN	下鶴	⇔	OUT	武田
	IN	松野	⇔	OUT	原
	IN	犬塚	⇔	OUT	大久保
23分[日本]	IN	横井	⇔	OUT	奥田

ゲームコンセプト

全員守備・全員攻撃

攻撃

- ①中央突破とサイドからの攻撃
背後・ワンツー・クロスの入り方（3つの場所）
- ②相手状況に応じたビルドアップ
1 タッチ・サポート
- ③パス・コントロールの質

守備

- ① 1 v s 1で勝つ（ボールとマークの同一視・粘り強く）
- ② ゾーンごと、数的状況における守備目的の違いの理解とプレー

切り替え

攻撃→守備：ボールへの素早い寄せ／バランス

守備→攻撃：・カウンター

- ・同サイドに出ていく
- ・逆（中央）サイドに出ていく

ゲーム内容

1、2セットは45分、3セット目は35分ゲームを行った。矢板中央高校は、攻守にわたり強度の高いプレーが見られ、アルゼンチン代表をイメージするにあたり、申し分のない相手であった。

3セット合計のポゼッション率38%、パス成功率61%と、矢板中央高校に押し込まれる時間帯が長く、思うように相手陣地にボールを運べなかった。しかし、相手の攻撃に対してチャレンジ&カバーを屈指し、粘り強い守備で対応ができていた。攻撃面では、相手のプレッシャーを過度に感じてしまい、ロングボールを回収され、守備に回る場面が多くなってしまった。決定的なチャンスは作らせていなかったが、前半27分、中盤の選手がDFラインに吸収されてしまい、空いたスペースをつかれ、失点をした。人数をかけて守れてはいたが、ボールホルダーに対して誰がアプローチいくのか明確にすることが課題となった。2セット目は、相手のプレースピードにも少しずつ慣れ、意図的なサイド攻撃から狙い通りのゴールを奪うことができた。失点のシーンでは、スローインのリスタートとクロスボール対応と、マークが甘くなってしまったところの一瞬の隙を突かれてしまった。3セット目も相手にサイド攻撃から失点を喫しまい、ペナルティエリア内のポジショニング(マークの同一視)も課題として浮き彫りとなった。

攻守にわたりこれまでのトレーニング成果が見られたが、少しのエラーがそのまま失点繋がってしまった。しかし、特に2セット目に関して、互角以上にプレーできる時間帯もあり、チームとしてもプレー強度、質が上がってきていることを確認できるゲームとなった。